

令和七年（二〇二五）三月二十七日発行
『大倉山論集』第七十一輯 抜刷
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

大倉邦彦の教育理念

―富士見幼稚園から大倉精神文化研究所へ―

林

宏
美

大倉邦彦の教育理念

―富士見幼稚園から大倉精神文化研究所へ―

林 宏 美

目 次

はじめに

一 富士見幼稚園の設立

①なぜ幼稚園を始めたのか

②目黒での開園

二 富士見幼稚園の教育

①園児の保育

②母親の教育

③卒園生の教育

三 大倉精神文化研究所の設立とその目的

四 研究所設立後の富士見幼稚園

五 富士見幼稚園の閉園とその後

おわりに

はじめに

大倉精神文化研究所の設立者である大倉邦彦は、大倉洋紙店（現、新生紙バルブ商事株式会社）の三代目社長として会社経営を行う傍ら、教育事業にも力を尽くしました。大倉の教育事業は大正十三年（一九二四）暮の富士見幼稚園設立をその始まりとしています。

幼稚園の設立から昭和七年（一九三二）四月の大倉精神文化研究所設立までの間には、郷里佐賀の農村工芸学院（現、佐賀県神埼市）、その姉妹校に位置づけられる浄牧女子工芸学院（現、東京都東久留米市）といった女子の教育機関を開設しています。また、研究所設立後の昭和十二年（一九三七）七月には東洋大学の学長に就任し、二期六年の任期を無給で務め、大学の立て直しに尽力しました。^①その他にも学生寮を複数開設し、寄宿する学生たちの経済・精神面の支援も行っています。

大倉邦彦は、これらの教育事業を自らの使命と考え、その精力を傾けました。ここではその始まりにあたる富士見幼稚園と今も唯一存続している大倉精神文化研究所、いわば最初と最後の関係にある二つの事業に焦点を当て、大倉の教育事業とその背景にあった想いについて見ていきたいと思います。

なお、史料の引用に際して、漢字の旧字体を当用漢字に改めています。

一 富士見幼稚園の設立

①なぜ幼稚園を始めたのか

大倉邦彦は、大正十三年の暮、東京府荏原郡目黒町中目黒（現、東京都目黒区中目黒）に富士見幼稚園を開園し、教育事業の第一歩を踏み出しました。大倉は大正八年（一九一九）から自宅敷地内に学生寄宿舎の「大倉学寮」（昭和六年「一九三一」に大倉山へ移転、「富嶽荘」と改称。）を開設していますが、こちらは学生の生活上の支援が主な目的でした。よって大倉自身が指導的立場で行う教育事業としては、富士見幼稚園は最初のものです。大倉は、富士見幼稚園について次のように述べています。

小学教育は比較的留意せられる様になったにしても、学齢に達する迄の幼児の教育は、一層重大な意義があるに拘らず、相変らず等閑に附せられて居ります。殊に幼稚園時代の教育は、潜在意識となつて人間の基礎をなすものであると確信して居ります所から、今や黙するに忍びず、敢て未経験な私が、此幼稚園を始めたのであります。⁽²⁾

当時の社会は小学校入学前の児童の教育をあまり重視していませんでした。しかし、大倉は幼稚園時代の教育の重要性を強く感じており、まず幼い児童から教育を始めなければならないと考えて幼稚園を設立します。幼児教育が人間形成に与える影響については、次のような考えも述べています。

「三ツ児の魂百造」といひますが、幼年時代の印象は一生の天性を形造るものであります。小さい時に深く心に刻みつけられた事は、自分も気が付かないであつて、恐ろしい潜在意識となつて働くものだといふことです。

熊の児は親熊が他の動物を威服する実物教育を受けて、自分の中にある強い血液を自覚する。乞食の子は親と一しよに稼ぎに行つて、「お貰ひ」を覚えると、自分は町を歩く世間の人々とは異^{ちが}つた乞食といふ人種だといふ観念を植ゑつけられてしまふ。

幼年教育は何といふ大きな力を持つものでせうか。国民教育についても十余年前からこの点に着眼して、日本

人として精神教育は幼稚園から始めなければならぬ、といふ信念を実行の世界にうつしたのが、研究所附属富士見幼稚園であります⁽³⁾が、今又一層力を入れて園児の教育を徹底させたいと意気込んで居ります。

熊と乞食の例えは現代では不適切な表現かも知れませんが、大倉が園児の教育をなぜ重視していたのか、非常にわかりやすく示しているのではないのでしょうか。

富士見幼稚園の開園時期については、その資料の多くで大正十三年暮の開園、翌十四年（一九二五）四月文部省認可と記載されています⁽⁴⁾。しかし実際に認可が下りたのは大正十四年十二月七日でした⁽⁵⁾。同年四月は大倉が東京府知事宛に認可申請を行った年月であり、富士見幼稚園の園舎が落成した時期でもありました⁽⁶⁾。大倉は園舎の完成を待つて幼稚園の設立認可申請を行ったものと推測されます。

認可に先立つ「大正十三年暮」を開園時期とした理由ははっきりとしません。ただ、研究所所蔵のアルバムに「富



【画像1】富士見幼稚園前身 子供ノ家
(6851)

士見幼稚園前身 子供ノ家 母親のない子供を預る家」と説明を付した二枚の写真⁽⁷⁾（【画像1】）があり、大正十三年暮は、この「子供ノ家」の開設をもって設定した可能性が考えられます。しかし「子供ノ家」の存在を伝える資料はこの写真のみで、やはり詳細は不明です。この写真の撮影場所は個人宅のような感じで、「子供ノ家」は大倉の自宅もしくは当時経営していた学生寮の一室を使用していたのかも知れません。

②目黒での開園

富士見幼稚園は現在の東京都目黒区中目黒、東急東横線祐天寺駅から徒歩十二、三分の場所に開園しました。目黒を選んだのは、大倉の自宅が同じ目黒区内あったことが理由だと思われます。幼稚園から自宅までは、徒歩二十分程度の距離でした。また、当時の社会情勢も、目黒での幼稚園設立を後押ししたようです。この点については、幼稚園設立認可申請書の「設置の目的」に記載があるので引用します。（丸数字、傍線は引用者による。）

①従来目黒町ニハ下目黒ノ一隅ニ日之出幼稚園アルノミニシテ他ハ入園志望者アルモ是ヲ収容スル施設ハ皆無ナリ、②シカノミナラス近時東京市及近郊ヨリノ移住者激増シ為ニ住家相次ギ益々幼児ノ保育ハ緊要トナレリ故ニ今般夫々関係法規ニ基キ幼稚園ヲ設置シ満三歳ヨリ尋常小学校ニ入学スル迄ノ幼児ヲ保育シ以テ其ノ心身ヲシテ健全ニ発達セシメ善良ナル習慣ヲ得シメ家庭教育ニ資補スル事ヲ以テ設置ノ目的トス⁽⁸⁾

①から富士見幼稚園開園以前の目黒町には、「日之出幼稚園」（日出幼稚園）しか幼稚園がなかったことがわかります。同園の歴史は大正八年に児童研究所附属幼稚園（日出幼稚園の前身）の園長に小林芳次郎が就任したことに始まります。⁽⁹⁾ 児童研究所は北垣守という人物が大正六年（一九一七）に児童教養の研究を目的として開設した研究所でしたが、大正八年に研究所は閉鎖となり、跡地には高輪淑女学校を経営していた小林芳次郎が学校を移転します。附属幼稚園も園児ごと引き受けて、後に日出幼稚園となりました。⁽¹⁰⁾ 日出幼稚園は平成三十一年（二〇一九）四月から目黒日本大学幼稚園となりましたが、現在も存続しています。⁽¹¹⁾

②の移住者の激増については、まず大正十二年（一九二三）三月の目黒線開業、同年十一月の蒲田線開業といった新たな交通機関の誕生が理由として挙げられます。また、移住者を増やした大きな出来事として、大正十二年九月の関東大震災があります。市街地が甚大な被害を受け、市民は交通至便な郊外への移住を希望します。目黒は市街地よ

りも被害が少なく、当時は農村地帯で土地もあり、鉄道の開通で利便性も高まったことから移住希望者の受け入れ先となりました。人口が急増したことで教育需要は大きく高まりましたが、優先されたのは学校の設置で、幼稚園については後回しにされました。そうした状況下で大倉による幼稚園設立は目黒町にとって願ってもないことであつたと思われ⁽¹²⁾ます。

また、設立認可の理由については、「目黒競馬場アリ此方約四五分時附近交通頻繁ナラス樹木多ク^マ空気清浄ニシテ園地トシテ適当ト認ム⁽¹³⁾」との記載があります。富士見幼稚園は目黒競馬場（明治四十年「一九〇七」開設、昭和八年「一九三三」東京競馬場へ移転⁽¹⁴⁾）から四、五分の場所⁽¹⁴⁾で、付近は交通量も少なく、空気も清浄で幼稚園の環境として最適である、ということです。こうした環境も大倉が目黒を選んだ理由に挙げてよいかと思ひます。事業地として不満のない、良好な環境であつたことは、大倉精神文化研究所の設立構想を練り始めた大正十四年五月の段階では幼稚園近辺にその建設用地を購入していたことからも窺えます。しかし、人口の急増とともに理想的な教育環境は急速に失われたようで、昭和三年（一九二八）には東横線太尾駅至近の丘陵地を研究所建設地として新たに取得しています。建設地変更の理由としては、建設用地付近の俗化が挙げられ、目黒は僅か二、三年の間に大きく様変わりしたようです。富士見幼稚園も開園が少しでも遅れていたら、他所に園地を求める状況になっていたかも知れません。

二 富士見幼稚園の教育

ここでは富士見幼稚園の教育について述べていきたいと思います。富士見幼稚園の教育は、①園児の保育、②母親の教育、③卒園生の教育、これらを一体で展開していたことが特徴です。以下、順を追って見ていきます。

①園児の保育

まずは園児の保育についてです。戦前の幼稚園は幼稚園令第一条で「幼児を保育して其の心身を健全に発達せしめ善良なる性情を涵養し家庭教育を補ふを以て目的」¹⁶としており、教育よりも保育が主眼となっていました。よって、ここでは「教育」ではなく「保育」の語を用います。なお、戦前の幼稚園は家庭教育の補完を目的としていましたが、戦後の幼稚園は、学校教育法の第二十二条で「義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的」¹⁷としており、家庭教育については特に触れていません。

富士見幼稚園での保育については、当研究所で所蔵する幼稚園の報告や日誌・教材等を基に既に詳述がなされています。¹⁸また、当研究所のYouTubeチャンネルでは、昭和十年から十一年にかけて撮影された富士見幼稚園の映像を公開しています。¹⁹映像には子どもたちの登園から退園まで、幼稚園の一日の様子が収められています。幼稚園での保育の実際はこれらをご覧頂きまして、ここでは、園児たちの保育がどのような考えの下で行われたのか、方針や理念の部分を中心に見ていきたいと思います。

まず、富士見幼稚園では、「保育の方針」として次の三項目を掲げていました（【画像2】）。

○富士見幼稚園は其名の様に気高く、心身共に強い、自然な子供を育て

○協同一致の習慣を付け

○そうして幼少の頃から天皇陛下日本国又は国際などの観念を与へる様に心掛けて居ります²⁰

この三項目には昭和四年までに「強く、賢く、親切に」²¹という標語が加わっています。また、三項目目の文言は昭和十六年（一九四一）以降に発行された幼稚園便覧を見えますと「幼少の頃から天皇陛下の御恩と御国体^{みくにがら}とに就い



【画像3】笑顔の大倉邦彦（6749-2）

及びますが、一部を抜粋して紹介します。題にある「学びの会」については後述します。

富士見幼稚園学びの会 児童教育講話

- 1 学校の教科書中心的教へ込みでなく、児童本然の生命を耕す事である。言換へれば宗教的情操教育である。
- 10 ふざけたりからかったりして児童を惹きつけ、友達にする代りにうら、かな春の心で、子供の心に花を咲かせる様に心掛け、落着いて子供の心になり、接近しなければならぬ。
- 11 初めから子供だと高を括ってか、つてはならぬ。子供ながらに一人格と見て真面目と熱心を以て相手になる

ことが教育的効果を顕はす所以を無視してはならぬ。

- 22 昔から子供は鏡だと言って居るのは、全く事実である。先づ心

から愛する気持で接した場合に適確に、不思議に子供が素直に応ずることによって明かである。又無心に機械的な行為も亦直に子供は真似をする。聖徳太子の所謂感応道交が教育の原理であることを事実²⁴に即して体験する。

大倉は子どもの教育を、子どもの心を耕す、良い花を咲かせる、といった言葉で言い表わしています。また、そのためには子どもの心になつてその心の内に飛び込み、寄り添い、心から愛する気持ちで接することが必要である、としています。また、田畑の土質や水はけ、日当りが一様でないように、子どもには一人一人個性があり、教育もその差を考慮して行わなければならないこと、教育は教育者と子どもの心とが交

わり合い互いに通じ合う、感応道交が原理である、といった考えを述べています。

大倉は笑顔の写真が少ないのですが、先に紹介した富士見幼稚園の映像では、大倉が笑顔で子どもたちと過ごす姿が収められています（画像3）。その表情からは、子どもたちを愛し、その心を耕して美しい花を咲かせたいと願う大倉の思いがひしひしと感じられます。この点からも是非とも映像をご覧頂きたいと思っています。

②母親の教育

園児の保育に続いて、母親の教育を取り上げます。富士見幼稚園では園児の保護者会を発展させた「学びの会」という集まりを設けていました。次の文書は、「学びの会」の最初期の案内と見られるものです。

家庭の婦人の向上進歩は国の基をなす大きな力で御座います、世の中は婦人の自覚でどの様に立派にも成るものと思います、然しながら只今の御婦人は家庭の中でそうした修養の機会やお稽古の時間をお持ちになる事が難しい様に思われます。そこで私共はその様な機会を作って皆様のお役に立つ様にと考へました。折から熱心な方の御希望も御座いましたので今度幼稚園を利用して毎週一回『学びの会』といふものを催す事に致しました。修養講話と手芸（最初は洋服裁縫（割出し）から始め順次其他の必要な手芸を学ぶ考で御座います）を科目と致しましたから何卒御来会下さい。⁽²⁵⁾

この案内には年代の記載がありませんが、大倉邦彦の初期の教育事業の記録、「精神運動書翰」の大正十五年（一九二六）頃の記録として、この文案もしくは写しと見られる同じ文章があります。⁽²⁶⁾

次は昭和三年前後に園児の家庭に配布したと見られる案内です。

学びの会趣旨

御両親が愛児を御教育なさる御心持ちと幼稚園保育の心持とは一致させ度いものと思ひます、そうでないと双方共に教育の効果は現は^マません、従つて幼稚園学校と家庭とは常に連絡を密接にしなければなら^マいばかりでなく、寧ろ幼稚園は家庭の延長と考へ度いと思ひます。此意味から双方から保育上の研究又は御相談致します為に折々会合が望ましい事で御座います。

又一方には家庭に於ける主婦は家族全員の教育宗教の中心指導者でなければなりませんから、常に主婦たる者は向上門を開いて思想的向上進歩と人格錬磨は一日も疎かにする事の出来ない事で御座います。然るに御婦人は目に見へぬ家庭の仕事に引きずられ勝ちになつて最必要な事が後廻しになり兼ねない有様で御座います。のみならず主婦の日々刻々の生活を矛盾なく意義あり光榮あらしめ、崇き使命を果される為にも修養の必要が御座います、然るに世間には此目的を達する適當の道がついて居りません。

此二つの目的の一端をも果し度い為に^マ学びの会と名けて従来続けて致して居りましたところ、私が先般欧州旅行不在以来中止されて居りましたのを再び始め度いと思ひます、又会員同志も心安く御話し合いますれば得る処かあらうと考へます。

昭和三年度

富士見幼稚園々長

大倉邦彦⁽²⁷⁾

この二つの案内から、学びの会は大正十五年には始まつていたことがわかります。また、活動が本格化するのは、大倉が研究所の構想を練るための欧州調査旅行から帰国した後と推測されます。⁽²⁸⁾ 学びの会は、家庭と幼稚園の教育方針の一致、婦人・母親の人格向上を大きな目的としており、そのための取り組みとして、修養講話や裁縫などの趣味

会、社会奉仕活動などを行っていました。⁽²⁹⁾ その他、会では社会見学なども行っており、様々な場所に向向いています。以下は日本飛行学校を見学した際の記録です。

横浜婦人修養会と合同で羽田飛行学校に見学を試みた、先づ相羽校長より約一時間にわたって飛行機に関するお話をきく、(中略) 飛行機は怖いものといふ一般の歎合を改めなければ斯界の健全な発達は望めないと結ばれた、私共母は子供にこの方面の教育をするに当って大いに蒙を啓かれた感をもったのである、

又人間の力では如何ともする事の出来なひ雲や風を相手にその許された範囲内に於て最善の努力を払って居らるゝ、この従業員達の間柄は常に円満でかつて喧争などハないといふお話を伺ったが、吾等の日常生活に省みて感動おく能はざるものがあつた。⁽³⁰⁾

飛行学校見学時の感想ですが、子どもの教育や日常生活の内省を交えている点が興味深いです。

学びの会は、園児の母親以外に会の趣旨に賛同し、入会を希望する女性を加えて活動を続けますが、昭和十五年(一九四〇)に突如として解散となります。その理由は大倉邦彦の多忙、参加者の減少、時局の影響でした。⁽³¹⁾ 但し、解散後も富士見幼稚園の母の会としては、各種講座や大倉の講話などが年に数回開催されていました。⁽³²⁾ また、会の活動に積極的に参加していた会員らは、戦後も「紫風会」の名で大倉の元に集まり、旧交を温めていました。研究所には迎賓館や大倉邸で撮影された紫風会の写真も残っています⁽³³⁾ (画像4)。

大倉が女性教育、母親教育を重視したのは、自身が母親の存在に大きな感化を受けていたことも理由の一つとして推測されます。それを示すものとして、『保育』昭和十七年(一九四二)四月号へ大倉が寄稿した次の文章を紹介します。

私の母は、余り教育のない人であつたけれど幼児のおもひ出にのこる母は、たゞ日がな一日、あっちへ行つた



【画像4】昭和38年11月9日 学びの会 迎賓館（6873）

り、こつちへ来たり、よくも働けると思ふほど、働いてゐた人であつた。その母をおもひ浮べることに、私はいつも浄化される。私は、この横顔の教育をしてくれた母を尊敬する。感謝する。

（中略）

三ツ児の魂百までといはれる通り、幼児の教育は、まだ耕されていない心田に、人生最初の鋤を入れるやうなものである。この時代の純真な魂にしみ込んだことは、潜在意識となつて、その人の生涯の基礎ともなり、長じて物事を認識し、判断する力も、この時代に芽生えるものである。それには、母親の感化といふことが与つて力のあるものである。⁽³⁴⁾

大倉は女性の社会的な役割を非常に重要視していました。郷里佐賀に女子の教育機関として「農村工芸学院」を開校したことも、それを具現化した一例です。大倉は会社経営者で、国民の半分を占める女性は国家発展の大きな力であると考えていました。⁽³⁵⁾しかし、大倉の教育観、殊に家庭教育における女性の役割に対する考えに大きな影響を与えたのは、大倉自身の母親への思いであつたのではないでしょうか。

当時の幼稚園が家庭教育の補完を目的としていたことは、「①園児の保育」の部分でも述べましたが、富士見幼稚園は家庭教育の不足を幼稚園が補うという視点ではなく、幼稚園と家庭が一致した方針で教育にあたることに重点を置いていました。そこで家庭で指導的役割を担う母親の向上進歩の必要性を強く認識し、園児の保育とともに母親の教育にも力を注ぎま

した。

③卒園生の教育

ここまで園児の保育、母親の教育について見てきましたが、最後は卒園した子どもたちに対する教育です。これは学校に通う子どもたちの教育と置き換えることが出来ます。大倉は、満六歳から十七、八歳までの男女を対象とした「富士見日曜学校」を昭和四年（一九二九）二月十七日に開校しています。その設立趣旨を開校時の発行と見られる日曜学校の案内で見えます。

是迄の学校教育は、機械的に智識を詰込む計りでありました。その片輪教育の弊害が今に現はれて、社会にはいろ／＼な問題を惹き起こして居ります。社会組織の改造が如何様にも号ばれても、完き人の教育が出来てゐなければ、凡ての努力は、要するに砂上に楼閣を築く様なものであります。完き人を作るには唯だ智識を詰込むだけでは出来ないであります。何うしても之に情と意志の教育を補って行かなければなりません。この日曜学校はこの点に於ける現代学校教育の不備を補ふためであります。即ち宗教的情操教育を基礎として博愛・奉仕の精神を培ひ、同時に国史教育を施して天皇を中心とする国家愛を伝へる事に努力いたしたいと思ひます。

つまり、社会で起きている様々な問題を解決するのに必要なのは社会を変えることなく、機械的に知識を詰込むだけの学校教育に情と意志の教育を補って「完き人」を作ること、それが日曜学校開校の目的でした。

日曜学校の活動報告を目的に発行された『富士見日曜学校』第一報では、この点をさらに詳しく述べています。ここでは日曜学校の教育方針は「良き人間を作る」ことだとしており、「良き」は「民族の存続発展に有益なこと」を指すとしています。それを踏まえた日曜学校の方針は「日本民族の存続発展に役立つ人間を作ること」、ひいては



【画像 5】 昭和6年11月29日 富士見日曜学校秋季遠足
(6935)

「国家生活に於て愛国的であること」「人間生活に於て心が幸福であること」としています⁽³⁷⁾。

日曜学校の指導者は、大倉が経営する学生寮の寄宿生や富士見幼稚園の保母らでした。担当となった学生の中には準備不足か精神的負担からか、突如声が出なくなるような人もいたようです⁽³⁸⁾。私としてはとても他人事とは思えず、親しみを感じます。日曜学校の活動としては遠足などもあり、研究所には世田谷区の九品仏や建設中の大倉精神文化研究所を訪れた際の写真が残っています⁽³⁹⁾（画像5）。

日曜学校は昭和九年（一九三四）一月から「富士見少年団早起会」と名称を変え、活動内容も刷新します。集合時間は朝の五時、場所は目黒の大鳥神社へと変更され、修養と錬成によつて忍耐力や意志力の養成を目指すものとなりました⁽⁴⁰⁾。そうした早起会の活動は、地域の人にも好意的に受け止められていたようです⁽⁴¹⁾。

なお、昭和十六年度の事業報告を見ると、早起会は同年度中にも四十回開催されましたが、目黒銃後少年団が地域で新たに結成されたことにより、その中へ発展的合流を遂げたと書かれています⁽⁴²⁾。合流以後の経過は不明です。

ここまで、園児の保育・母親の教育・卒園生の教育を順に見てきました。富士見幼稚園では、これらを個々に独立したものではなく、国家の将来を担う子どもたちの教育という大きな目的の下に一体のものとして行つたことが、教育的特徴であつたといえます。

三 大倉精神文化研究所の設立とその目的

大倉の当初の計画では、富士見幼稚園を開園した後、大学に至るまでの教育機関の設置を進める予定でした。しかし後にその考えを改め、精神文化研究所設立に至ります。⁽⁴³⁾大倉は、当時の社会は身分やその貧富を問わず、全ての人が人生の帰趨に迷っており、この解決のためには、社会の制度や組織の改造ではなく、悩む人々に宗教的人生観と国民意識を持たせることが必要だと考え、そのために教育事業を始めました。しかし、大倉は教育機関を設立したことで、自身の目的達成のために務めを果たすことができる教育者の不在を認識することになります。強く正しい信念を持つてその指導にあたる教育家や宗教家＝教育者がいなければ、結局長む成果が得られないことに気づいた大倉は、教育者養成のための研究所設立へと舵を切ったのです。⁽⁴⁴⁾

大倉は日曜学校の趣意にもあるように、学校教育は知識偏重に陥って精神面を軽んじていると批判しています。⁽⁴⁵⁾また、当時の教育者については、「自己の内心に堅固なる信念を持する能はずして、唯だ大衆に阿諛追隨するもの少なからず。甚しきはその尊き職業を生活の為の手段と考ふるものさへあり。真によく世道人心を指導するに足るべき古今に透徹せる人生観に立脚して、その職責を尽しつづあるものは極めて少しと言はざるべからず。」と不満を感じていました。⁽⁴⁶⁾

大倉は研究所から正しく強い信念を持った教育者を輩出したいと考えていましたが、決して完成された人間を求めている訳ではありません。大倉は、「特に教育者だからとて智徳の完全を要求はしない。常に不完全より完全へと努力する熱誠そのものこそ教育者の生命である。己を知り、己を養ひ、己を研いた結果其こほれが感化であり、教育で

ある。」と述べています。また、教育者が自己完成すべく努力もせずに子どもがよくなることばかりを願っても、それは棚から牡丹餅を待つに等しく、信仰によって智を磨き徳を修める、修養によって心の底から自然に沸き出て来る熱情・愛情・慈悲が行動に顕れた時、子どもの心に感化を与えられるのだと考えていました。⁽⁴⁸⁾

さて、大倉は昭和七年四月九日の研究所開所式の式辞で、「今こゝに建築の輪奐成ると雖も、それは堂構の美を以て誇りとすべきものではない。ひたすらに皇国の永遠を希ふ一念に発し、将来の窮みなき活動と発展を約束する生命でなければならぬ。形式は信念の具象である。」⁽⁴⁹⁾と述べたとされています。この言葉のとおり、研究所の建築は大倉自身の想いを表現しています。建物は知徳を兼ね備えた理想の教育者の姿であり、その中央部分は心を表わし、清明心を表わす心の間（エントランスホール）、信仰心を養う殿堂（ホール）、心を鍛える坐禅道場（ギャラリー）が設けられています。そして建物の東西は知性を表わし、その部分には図書館や研究室が設けられました。図書館は今も精神文化の専門図書館として、地域の公共図書館として運営され、広く一般に公開しています。このように研究所は、不完全から完全へと向かうための自己修養の場であり、大倉が研究所で育てようとした教育者の姿そのものを表しています。

四 研究所設立後の富士見幼稚園

昭和七年に設立された大倉精神文化研究所は当初、大倉個人の事業として運営されていました。その後、昭和十一年十二月に文部省所管の財団法人となります。⁽⁵⁰⁾ 研究所について大倉は、その建設開始前から「大倉私財を以て支弁し、財政・事業内容充実の上、財団法人となす」⁽⁵¹⁾としており、法人化は最初から既定路線でした。富士見幼稚園も大倉の

個人事業として運営されていましたが、昭和十二年度から財団法人大倉精神文化研究所附属富士見幼稚園となります。その影響は会計処理などの事務手続きの一元化等に見られる他、法人化以降の幼稚園の報告書や日誌類が今も研究所に残されているのは研究所の附属となったことに拠るものと考えられます⁽³²⁾。

しかし、事務処理以外の部分はさほど変化がなかったとも見ることができます。幼稚園をはじめとする大倉の個人事業は財団法人化以前から「大倉経営事業」として体系化されており、関係者の行き来は各事業の開始時から行われていました。日曜学校はその好例です。また、大倉はそれらの関係者による「富士見会」という集まりを設けて、会員の相互理解と各事業のさらなる発展・充実を図っています⁽³³⁾。資料上、「富士見会」の名称は昭和二年（一九二七）から十一年頃までしか見られませんが、事業関係者の懇親会等とは後も継続して開催されており、事業の一体性とともに、同じ目的に向って進む同志として心のつながりも大切にしていたことが窺えます⁽³⁴⁾。

五 富士見幼稚園の閉園とその後

昭和十九年（一九四四）四月二十七日、富士見幼稚園は太平洋戦争の戦況悪化に伴う東京都からの保育事業休止の通牒に従い、同月末での休園を決定します⁽³⁵⁾。五月五日には休園式が行われ、その日の幼稚園の日誌には、「二十年の長い歴史を持つ此の園が長期休園に入るのかと思へばおしまれてなりません。新学期始った許の所にて、お子様方もやう／＼馴れましたのにお母様方も非常に残念がつて居られました。どうぞ一日も早く再開出来る様と願はれます⁽³⁷⁾。」と、惜別の思いが記されています。

休園後は、富士見幼稚園の園舎を利用して、財団法人大倉精神文化研究所附属富士見女子実務錬成所を開設すべく

準備が進められました。目的は、男子の代わりとなる勤労女性に実務錬成を施し、官庁・企業・工場の要員としての技能と、日本女性として相応しい教養を授けることにありました。期間は同年八月一日からの二ヶ月間で、六月から入所申込の受付も開始し、十五名の申込みがありました。⁽⁵⁸⁾しかし当時の情勢から集団的錬成は困難ということで、錬成所の開設は無期延期となります。⁽⁵⁹⁾なお、会場は途中で大倉精神文化研究所に変更され、幼稚園施設は昭和十九年九月から全国農業会家の光協会に貸与しています。⁽⁶⁰⁾施設貸与は昭和二十四年（一九四九）九月まで続き、賃料による収入確保が図られました。⁽⁶¹⁾

戦後の研究所は潤沢な資金で事業を展開した戦前とは一転し、社会と経済情勢の混乱の中で困窮に陥ることとなります。研究所自体の維持すらも厳しい状況では、幼稚園の再開はおろか施設維持もはや困難でした。そして昭和十五年（一九五〇）九月二十一日、富士見幼稚園の土地と建物は極東福音十字軍に売却されています。⁽⁶²⁾

それから二年後、昭和二十七年（一九五二）九月には極東福音十字軍から日本カヴェナント宣教会がこれを購入し、翌月二十日に聖契神学校が開校しています。開校当初は旧園舎を校舎として使用していたようですが、昭和三十二年（一九五七）に新校舎へと建て替えられています。⁽⁶³⁾

富士見幼稚園跡地に現在も位置する聖契神学校は司祭・牧師など教職者の育成を行う超教派の神学校です。大倉邦彦自身は仏教、中でも禅宗に傾倒していましたが、義父大倉文二は敬虔なキリスト教徒であり、義祖父孫兵衛もキリスト教の思想的影響を受け、両者は会社経営とともに社会貢献活動にも積極的に取り組みました。信仰を土台とする二人の人生観や社会貢献に対する考え方は、邦彦にも少なからぬ影響を与えたとされています。⁽⁶⁴⁾また、欧州視察の際に、聖書がどの家庭にも常備されていたことから、日本にも国民の思想の指針となるような教典をつくりたいと考え、研究所で編纂・刊行されたのが『神典』です。⁽⁶⁵⁾富士見幼稚園の跡地に神学校が開校して、人を教え導く宗教家の教

育・養成が今も続けられていることには、不思議な縁を感じざるを得ません。

おわりに

大倉は「世の為に田を耕す」の題で次の随想を遺しています。

農夫が田を耕すは、自ら食ふ為ではない。人に食はせんが為だと考へるのが妥当であり、高尚である。其間に自ら食ふのは、生きて耕し、人に食はせん為の道行きに過ぎない。

官吏も、宗教家も、実業家も斯くあり度い。⁽⁶⁶⁾

これは世の為に田を耕す農夫の高尚さに対する賛辞であるとともに、仕事や職業を自分の生活の糧、自らが食う為の手段としか見ていない官吏・宗教家・実業家たちに対する批判ともいえます。

ここで大倉が監修していた月刊修養雑誌『躬行』掲載の「心田開拓」という記事を紹介したいと思います。⁽⁶⁷⁾「心田開拓」は二宮尊徳の思想として知られるものです。尊徳は田畑が荒れることも、社会の中で怠惰に日々を送る者や資産を浪費する者がいることも、人心の荒蕪が原因であり、これを開拓して熟田（よく耕作された肥沃な田）とすることで荒れた田畑も社会の問題も解消されて、最終的に国の富強が実現すると説いています。⁽⁶⁸⁾大倉の教育に対する考えも、この「心田開拓」の考えが根本にあるのではないのでしょうか。『躬行』の記事では、国の富強とは物の多さではなく、国民の道徳的向上のために物を有効に使う高尚な心を持つ人が多くいることであり、国民としての務めを立派に実行して日々徳を積む人が最も多い国こそが、最も富強な国であると述べています。⁽⁶⁹⁾この記事は無記名で、大倉の執筆とは断言できないのですが、大倉が教育事業で目指したのは、日々徳を積む人が最も多い国をつくるための「心

田開拓」ではなかったかと私は思います。

大倉は子どもの教育を「まだ耕されていない心田に人生最初の一鍬を入れるやうなもの」と考え、富士見幼稚園で子どもたちの教育に取り組みました。そして、研究所は正しい信念と熱情をもって心田開拓を行う人、いわば「世の為に心田を耕す」ことが出来る教育者の養成が目的であったといえるのではないのでしょうか。

大倉精神文化研究所は、今も大倉の「世の為に田を耕す」の言葉を心に置き、公益財団法人として活動を続けています。そして大倉自身の想いを形にした大倉精神文化研究所本館、現在の大倉山記念館は建築時とほぼ変わらぬ姿でその想いを今に伝えています。是非とも足を運んで大倉邦彦の想いに直接触れていただけたら、これに勝る喜びはありません。

（編者付記）本稿は、令和六年（二〇二四）四月十三日の大倉山講演会「大倉邦彦の教育事業―富士見幼稚園から大倉精神文化研究所へ―」（横浜市大倉山記念館第四集会室）の講演内容に、加筆修正を加えて成稿したものである。

注

- （１）大倉邦彦の東洋大学学長就任に関しては、三浦節夫「東洋大学学長、大倉邦彦」、豊田徳子「大倉邦彦の東洋大学運営―その方針・施策と結果―」（『大倉山論集』第五十輯、平成十六年）を参照。
- （２）研究所沿革史資料No.387-1『富士見幼稚園便覧』（昭和三年頃か、一・二頁）、研究所沿革史資料No.290『大倉邦彦』私の使命事業』皇紀二五八九年版（昭和四年、四十六・四十七頁）。

- (3) 「大倉山だより 一、富士見幼稚園の進軍ラッパ」(大倉邦彦監修『躬行』第三十三号、昭和十一年十一月一日、躬行会、三十六頁)。
- (4) 前掲注2の他、研究所沿革史資料No.328「財団法人大倉精神文化研究所『使命事業』皇紀二千六百一年五月増補(昭和十六年六月二十五日、四十六頁)でも「大正十三年末開園し、大正十四年四月文部省の認可を得たり。」と、沿革についてはその年代を問わず同様の説明がなされている。なお、幼稚園は文部省(現、文部科学省)所管の教育機関であるが、設立認可の申請先および認可者は地方長官であり、富士見幼稚園の場合は東京府知事が認可者である。よって「文部省認可」ではなく「東京府認可」が正しく、研究所沿革史資料No.303「昭和十六年度 事業報告」(財団法人大倉精神文化研究所、昭和十七年四月三十日、四十九頁)や、研究所沿革史資料No.338「『富士見幼稚園便覧』(昭和十六年か、表紙・三頁)等では、大正十四年四月東京府認可と記載されている。
- (5) 「指令案」大正十四年十二月七日施行、東京都公文書館所蔵。
- (6) 前掲注4『使命事業』皇紀二千六百一年五月増補、五十頁。
- (7) 研究所沿革史資料No.851「(写真)知人関係」。
- (8) 前掲注5「指令案」。
- (9) 学校法人目黒日本大学学園ウェブサイト「学園案内／理念・沿革」(<https://www.meguro-nichidaied.jp/senior/about/history/>)には、大正八年に「現在地目黒の『児童楽園(児童研究所)に移転／児童研究所附属幼稚園(日出幼稚園の前身)園長に小林芳次郎が就任」と記載がある。『東京教育史資料大系 第九巻』(東京都立教育研究所、昭和四十九年三月十五日)には、児童研究所附属幼稚園(三十八～四十頁)と富士見幼稚園(九十六～九十八頁)の設立認可申請書が転載されている。
- (10) 北垣守の経歴および児童研究所の歴史については、山崎史郎「我が国心理学者による「児童の相談」の始まりと展開(前編)―児童教養研究所(目黒)を巡って―」(熊本学園大学論集『総合科学』平成二十九年三月二十五日)を参照。

- (11) 前掲注9、学校法人目黒日本大学学園ウェブサイト「学園案内／理念・沿革」。
- (12) 前掲注5「指令案」には、大倉の幼稚園設立認可に対し、当時の荏原郡長が東京府知事に宛てた次の申し添えがある。
 (前略) 近時目黒町中目黒付近ハ非常ナル發展ヲナシ随ツテ人口ノ増加著シク特ニ居住民中ニハ中産階級以上ノモノ多数有之候ニ付本園ノ設立ハ土地ノ状況ヨリ觀テ至極適當ト被認候條御認可相成様致度及副申候也
 また、文中に「居住民中ニハ中産階級以上ノモノ多数有之候」とあるが、富士見幼稚園の入園志願者明細書（沿革史資料N/23400）5402「入園志願者明細書」に記載された保護者の職業を見ると、官僚、公務員、大学教授、医者、会社経営者などが多く、中産階級以上の家庭からの教育需要の多さが窺える。
- (13) 前掲注5「指令案」。
- (14) 目黒競馬場跡は現在住宅地となっているが、目黒通りの「元競馬場前」のバス停や交差点名にその歴史を留めている。
- (15) 前掲注2『私の使命事業』皇紀二五八九年版では、「目黒の建設予定地付近が段々俗化して来ましたので、其所を放棄して、新たに東京横浜電鉄沿線の太尾村に、約七千五百坪の小丘を買入れ（以下略）」とある。また、研究所沿革史資料N/23495「日誌」の昭和三年三月二十一日には、「目黒町中目黒図書館予定地は附近に瓦斯タンクが出来たといふ理由で売却する事に決し、新たに横浜電線太尾といふ所に一万坪の敷地を購入する事になる」と書かれている。目黒の旧予定地は後に分譲販売されたようで、販売にあたっては五島慶太に中目黒・目黒駅への立て看板設置許可を求めている（研究所沿革史資料N/23481「東京横浜電鉄五島慶太宛大倉邦彦書簡」昭和五年四月十五日）。
- (16) 幼稚園令（大正十五年四月二十二日勅令第七十四号）第一条。
- (17) 学校教育法（昭和二十二年三月二十九日法律第二十六号）第二十二条
- (18) 大岡紀理子・大岡ヨト「昭和初期の保育の実際に関する一考察―大倉邦彦の教育理念と特別活動的視点―」（『大倉山論集』第六十二輯、平成二十八年三月）を参照。
- (19) 公益財団法人大倉精神文化研究所のYoutubeチャンネルでは、富士見幼稚園の動画四本を公開している。

(20) 研究所沿革史資料No.1472「精神運動書翰」貼付の「保育の方針」（大正十四年三月頃か）。

(21) 前掲注2『私の使命事業』皇紀二五八九年版、四十九頁。

(22) 前掲注4『富士見幼稚園便覧』三頁。

(23) 研究所沿革史資料No.983「院主書簡」昭和三年五月五日（農村工芸学院『学院読本』一七九―一九〇頁）、本資料は、平井誠二・岡崎寛徳「大倉邦彦「院主書簡」―翻刻と解題―」（『大倉山論集』第四十六輯、平成十二年九月三十日）で全文を読むことが出来る。当該部分は二五三―二五九頁を参照。これを簡潔にしたのが、大倉邦彦「感想」其五（昭和四年二月、十二・十三頁）に掲載された次の随想である。

純真な子女の心田を耕すには、其の心田に飛び込まなければならぬ。下駄穿きのまゝや、遠方からは、種子も蒔かれず、培ひもされない。

なお、この随想は昭和七年に刊行された合冊版の『感想』自其一至其八（昭和七年八月、一一七頁）においては「教育者は全自己を投出せ」の題が付されている。教育に関する大倉の随想は前掲注18の大岡両氏の論稿でも多数紹介されているので参照されたい。

(24) 研究所沿革史資料No.981大倉邦彦「富士見幼稚園学びの会 児童教育講話」（年不詳）。

(25) 研究所沿革史資料No.986「学びの会案内」、また同番号で整理されている一連の資料として、ほぼ同文の別の案内も存在するが、発行者は「富士見幼稚園内学びの会」となっている。こちらも年代の記載はなく、前後関係は不明である。

(26) 前掲注20「精神運動書翰」、本資料については、公益財団法人大倉精神文化研究所「翻刻 研究所沿革史資料「精神運動書翰」（大倉邦彦先生教育事業の記録）」（『大倉山論集』第六十八輯、令和四年三月二十五日）に全文翻刻と解題を掲載している。当該部分は本誌二九六頁を参照。

(27) 研究所沿革史資料No.989「学びの会趣旨」、こちらの文書は大倉邦彦の名前で出されているが、富士見幼稚園学びの会の名前で昭和三年五月四日に出されたほぼ同文の案内が別にある。

(28) 「大倉精神文化研究所沿革年表（自大正八年至昭和十六年）」（大倉先生献呈論文集『国史論纂』躬行会、昭和十七年二月二十六日、年表四頁）では、昭和二年に「富士見幼稚園々児母親の修養会学びの会を発会す」とあるが、「学びの会」の発足自体

は大正十五年、会合を定期的に行うようになり、会として実体を持つようになるのが昭和二年以降と思われる。なお、昭和十一年五月十六日に富士見幼稚園で学びの会十周年を祝う催しが行われている（研究所沿革史資料 No.5746「学びの会記録帖」）。

(29) 学びの会では社会奉仕活動として幼稚園を会場にバザーなどを行い、趣味会での製作品の販売、食堂の営業などを行っていた。大倉の経営する「富嶽荘」の寄宿生たちはその手伝いに借り出されている。「富嶽荘日誌」昭和六年十月十七日（研究所沿革史資料 No.13165）のバザーに関する記録として「うれしきは工芸学院の手工品、重にエプロン、ハンカチの五十円以上の売高を博し事なり。」とあり、大倉が郷里佐賀に開設した農村工芸学院の生徒らの製作品もバザーで販売されたことがわかる。なお、これを書いた江下清一氏は佐賀県佐賀市の出身で、大倉と同様に旧制佐賀中学校から東亜同文書院へ進学し、研究所にも勤務した人物である。

(30) 前掲注28「学びの会記録帖」昭和十一年六月十九日。「羽田飛行学校」は日本飛行学校のことであり、学校は東京飛行場（現、東京国際空港）内にあった。飛行学校の見学については『躬行』第三十号（躬行会、昭和十一年八月一日）の「大倉山だより」でも紹介されており、ここには「蒲田飛行場見学」との記載もある。また、記録帖を辿ると、見学先としては日本飛行学校の他、「玉川砧村のPCL撮影所」（昭和九年二月二十二日、現在の東宝スタジオ）、「四谷慶応大学病院の家庭医学研究会」（昭和九年四月二十八日）、「大船、富岡ハム製造所」（昭和十年三月十四日）、警視庁・帝国ホテルの台所・放送局（昭和十一年十月二十二日）などを訪問している。しかし日中戦争開始により、昭和十二年九月三日に学びの会幹事が大倉と相談した結果、以後の見学は取りやめとなっている。

(31) 前掲注28「学びの会記録帖」昭和十五年九月十八日、大倉から学びの会の解散と次の理由が告げられた。以下、引用である。

理由

一、大倉先生の公私は御用務御多忙にて指定の時日には御出席の無理なる事

二、出席会員小數

三、新体制の趣旨に基き時局に添ひて各自に其責任を尽し実行に邁進する事

特に出席の少なき点には会員一同反省して各自の責任の重き事を痛感せり

翌月の十月二十八日には感謝の会が行われ、大倉と会員四十九名が参加している。

(32) 前掲注4「昭和十六年度 事業報告」、研究所沿革史資料No.305「昭和十七年度 事業報告」(財団法人大倉精神文化研究所、昭和十八年五月十五日)、No.307「昭和十八年度 事業報告」(財団法人大倉精神文化研究所)。

(33) 研究所沿革史資料No.6873「学びの会 迎賓館」昭和三十八年十一月九日、No.6878(学びの会 大倉邦彦邸)昭和四十二年十一月五日など。

(34) 研究所沿革史資料No.888大倉邦彦「大東亜建設と保育随想」(『保育』第六十号、保育発行所、昭和十七年四月十五日、六七頁)。

(35) 大倉は「女子の力」と題する随想で「国民力の増大を望むなら男子よりも遙に女子に可能性が多い。永い間被圧階級として取扱はれ、力を伸す余地がなかつた女子は人口の半数を占めて居るから、此処に眼をつけなければならぬ。」(『感想』其三、昭和二年二月十一日、二十二頁初出、題は前掲注23『感想』自其一至其八、七十六頁)と述べている。

(36) 研究所沿革史資料No.321839「富士見日曜学校」(趣意・規定・入学願書)。

(37) 研究所沿革史資料No.5949「富士見日曜学校」第一報、昭和四年二月十六日。

(38) 前掲注29「富嶽莊日誌」昭和五年六月二十九日に「日曜学校。組分せず諸先生順次にお話。但、急に風を引いて声の出なくなりたる先生あり。」の記載がある。

(39) 研究所沿革史資料No.6873「富士見日曜学校九品仏遠足」昭和四年十月十三日、No.6835「富士見日曜学校秋季遠足(太尾研究所広場二於て)」昭和六年十一月二十九日。

- (40) 研究所沿革史資料No.32大倉邦彦『使命事業』皇紀二五九四年度版（昭和九年九月五日）六十四～六十八頁。
- (41) 「富士見少年団早起会」（『躬行』第三十七号、昭和十二年三月一日、二十六・二十七頁）。
- (42) 前掲注4「昭和十六年度 事業報告」四十四頁。
- (43) 前掲注2『私の使命事業』皇紀二五八九年版、一頁、研究所沿革史資料No.325『精神文化研究所要覧（覚書）』（昭和四年四月頃、四頁）「経過略史」、内容はほぼ同じだが、『私の使命事業』の方が記述は詳細である。
- (44) 前掲注2『私の使命事業』皇紀二五八九年版「設立の趣意」（四～六頁）。なお設立の趣意は、年代により文言に若干の相違がある。
- (45) 前掲注36「富士見日曜学校」（趣意・規定・入学願書）。
- (46) 前掲注2『私の使命事業』皇紀二五八九年版、五頁。
- (47) 「自己完成の努力」（『感想』其二、大正十五年二月十一日、二十六・二十七頁初出、題は前掲注23『感想』自其一至其八）。
- (48) 前掲注23「院主書簡」昭和三年五月五日、研究所沿革史資料No.323511（富士見幼稚園保母宛大倉邦彦書簡、昭和三・四年頃か）。
- (49) 原田三千夫・牟田直「大倉精神文化研究所の創設まで―その沿革―」（前掲注28『国史論纂』七二四頁）。
- (50) 研究所沿革史資料No.162054「研究所設立を民法第三十四条により許可ス」昭和十一年十二月二十六日、財団法人設立許可書の写し。
- (51) 前掲注43『精神文化研究所要覧（覚書）』六頁。
- (52) 幼稚園の報告書・予定表・日誌類は、昭和十二年度以降の分については、現在研究所で所蔵している。一方で昭和十一年以前の幼稚園の資料は、入園申込書や園児の名簿、園で使用された教材等が今も多数研究所に残る一方で、報告書等の記録はほぼ見当たらない。この点は法人化以前の記録が移管されなかった可能性と記録そのものが存在しなかった可能性の両方が考えられる。なお、閉園後の昭和十九年七月十九日・二十四日・二十八日、八月十四日、二十八日の五日間で、幼稚園の荷

物の研究所への搬入が行われたこと、幼稚園にあったピアノは売却され、同年十一月十三日に栃木県の足利へ運ばれたことが、研究所の日記（研究所沿革史資料No.249）に記されている。また、研究所だけでなく、目黒の大倉邸に運んだ物品もあったようである（研究所沿革史資料No.592「富士見幼稚園・備品」）。

- (53) 研究所沿革史資料No.355『心の使』第一号（富士見会、昭和四年十一月二十日、一頁）、『心の使』第三号（富士見会、昭和五年五月二十日、一三二頁）、『心の使』は前掲注37の『富士見日曜学校』が第二十報まで発行された後、日曜学校以外の諸事業まで対象を拡大し、その後継として発行された富士見会の機関誌である。第三号以降の発行は確認出来ないが、研究所設立以前の大倉の教育事業に関する報告が掲載されており、当時の活動実態を知るうえで貴重な資料である。

- (54) 研究所の日記には、新年会・忘年会・歓迎会、中には来客時や催事後のおでん会等の記載があり、さまざまな形で関係者が食事を共にしながら報告や歓談で時を過ごしたようである。

- (55) 研究所沿革史資料No.1620-23「公私立幼稚園非常措置に関する件」昭和十九年四月十九日。

- (56) 研究所沿革史資料No.6450「富士見幼稚園 日記」昭和十九年四月二十七日、No.1620-22「幼稚園休園届の件」昭和十九年四月二十七日。

- (57) 前掲注56「富士見幼稚園 日記」昭和十九年五月五日。

- (58) 研究所沿革史資料No.635-29「財団法人大倉精神文化研究所附属富士見女子実務錬成所」（要項・入所申込書）、No.6682「富士見女子錬成所・受付名簿」昭和十九年七月。設立にあたっては東京都と警視庁の後援も得ていた。

- (59) 研究所沿革史資料No.309「昭和拾九年度末報告書（事業報告）（写）」（財団法人大倉精神文化研究所、昭和二十年五月三十日）。なお、錬成の中止は会場が幼稚園から研究所へと変更になった後、研究所の建物を海軍気象部が借用することになったためと推測される。

- (60) 前掲注59「昭和拾九年度末報告書（事業報告）（写）」、沿革史資料No.8219-27「（中目黒住宅及び校舎の賃貸）契約書」昭和十九年九月二十九日、No.8219-28「（中目黒住宅及び校舎の賃貸）契約書」昭和二十一年八月七日。また『家の光五十年の人

と動きと』(社団法人家の光協会、昭和五十一年十一月二十五日、三三三・三三四頁)には「十九年十一月からは、敵の大編隊の空襲となったので、家の光もこのまま一か所にあつては危険であるように思われた。ちょうどその時、大倉洋紙店の社長の経営していた中目黒にある富士見幼稚園が閉鎖され、あいているから使つて貰つてもよいというので、とりあえず業務部の配給課と計算課を移すことになった。」とある。また、『家の光の二十五年』(家の光協会、昭和二十四年五月一日、八十二頁)、『家の光の四十年』(社団法人家の光協会、昭和四十三年十二月、一六〇・一六一頁)には昭和二十年五月一日の『家の光』創刊二十周年記念の会合を幼稚園の講堂で行つた際のエピソードが記されている。

(61) 研究所沿革史資料No.332「昭和二十四年度事業報告書」大倉山文化科学研究所、但し、前掲注60『家の光の二十五年』八十七頁には終戦とともに、中目黒の富士見幼稚園を引きはらつたとの記載が見られる。

(62) 研究所沿革史資料No.337「売買契約書(写)」昭和二十五年九月二十一日(富士見幼稚園・建物書類)。

(63) 聖契神学校ウェブサイト「神学校案内／沿革」参照(<https://seiki-seminary.org/about/>)。また、目黒カベナント教会ウェブサイト(<http://www.meguro-covenant-sakurane.jp/meguro.htm>)によれば、昭和二十七年十二月から聖契神学校内で主日礼拝と日曜学校を持ったのが、目黒カベナント教会の出發であり、旧幼稚園前での撮影と見られる写真も掲載されている。

(64) 義父大倉文二・義祖父大倉孫兵衛の思想については、平井誠二「晩年の大倉孫兵衛―社会貢献の志とその継承―」、打越孝明「大倉洋紙店二代目店主大倉文二―その生涯と事業―」(『大倉山論集』第五十四輯、平成二十年三月)及び星原大輔「世の為に田を耕す―大倉家三代の生き方―第三十八回研究所資料展の報告を兼ねて―」(『大倉山論集』第六十五輯、平成三十一年三月)を参照。

(65) 『神典』編纂事業は昭和七年十二月から開始され、昭和十一年二月十一日に初版が刊行された。現在も神社新報社によって版が重ねられている。

(66) 『感想』其六(昭和五年二月十一日、十九頁)。題は前掲注23『感想』自其一至其八(一四九頁)。

(67) 「心田開拓」(『躬行』第四十二号、躬行会、昭和十二年八月一日、十八・十九頁)。

(68) 前掲注 67 「心田開拓」。

(69) 前掲注 67 「心田開拓」。